## 3　時すでに遅し

第一次世界大戦でのオスマントルコ帝国の崩壊は、中東でのアラブ・ナショナリズムの台頭を速めた。[1] 連合国、なかでもフランスとイギリスは、反トルコ政策についてアラブ人の支持を取りつけると同時に、アラブ世界の内部で影響力ある地位を確保するために、この感情を利用した。その結果として、連合国――連合国同士も時にライバル関係にあった――と、これまたライバル関係にあるアラブ人指導者たちのあいだに、様々な秘密協定が――それも、しばしば互いに矛盾した協定が結ばれた。

こうした陰謀の錯綜は部分的には一九一九年のパリ講和会議によって鎮静化されたのだが、この会議の課題はというと、連合国のそれぞれが中東に適用している数々の規制を調整し、今やトルコの支配から解放されたアラブの領土の分配について決定を下すことにあった。パレスティナに関しては、状況は限りなく困難だった。それというのも、パレスティナという呼称を維持されるべき土地（当時パレスティナは明確な地政学的境界をまったく有していなかった）に生まれたアラブ人は明らかに多数派だが、同じくシオニストたち――彼らの願いはバルフォア宣言によって支持された――も、パレスティナという土地への諸権利、ただし本来は（アラブ人の諸権利とは）両立不能な諸権利を主張したのだから。講和会議の最初の会合では、一九一九年一月のファイサル＝ヴァイツマン協定のなかで芽生え始めたようなシオニストたちとアラブ人との友好的な取り決めがともかく不可能ではないと見えた。パレスティナ、ロンドン、そして最後にはパリでの何度もの会合の後で、アラブ・ナショナリズムの高名な指導者エミール・ファイサルと、講和会議にシオニストの代表団を率いていったハイム・ヴァイツマンは、シオニズムとアラブ・ナショナリズムの両立の可能性、これら二つの運動のあいだのありうべき協働のことを話題とした公式文書に署名した。[2] 残念ながら、この合意はうまく働かなかった。当時の段階では、連合国はそれを促すことができなかった。なぜなら、連合国同士、いかにして中東での影響圏を分け合い、また制限するかについて合意を得ることができなかったからだ。そうでなくとも、ファイサルとヴァイツマンとの合意は他のアラブ人指導者たちによってすぐさま拒絶されたのだった。

アラブ世界では、バルフォア宣言ならびに、パレスティナでのユダヤ人の民族＝国民的家邦建設という意図への反抗が目覚めていた。[3] ヨーロッパの主要国に派遣された代表団がアラブ人のパレスティナを訴えているあいだ、パレスティナでは一連の示威運動と大規模な政治集会が行われていた。バルフォア宣言の実行に反対するアラブ人の闘いは、パレスティナの委任統治を引き受けようとする英国の決断がぐらついているように見えるのに乗じて、その活力を得ていた。パレスティナでの軍事政府は、この地域を占領した時にイギリス人によって設けられ、この点に関する最終的取り決めで合意が得られるに至るまで連合国評議会によって公式にイギリス人に任されたのだが――この政府は、シオニストたちの努力に対してまったく敵対的だったわけではないにせよ、明らかにそれに対して無関心だった。時が経つうちに明らかになったように、軍事政府の措置はロンドンからの指令にもとづくものではなかったのだが、アラブ人はそのことから、大英帝国はもはやシオニズムの大義にそれほど関心を抱いていないと結論づけた。そこでアラブ人は、英国政府にいや増す圧力をかけて、シオニズムに対する責務を英国政府が放棄するよう仕向けた。一九二〇年四月中旬に開催され、とりわけ、パレスティナの将来の運命について最終的な決断を下すはずだったサンレモ会議の前夜、アラブ陣営の戦術は暴力路線に転換し、その結果、パレスティナのユダヤ人入植者に対する殺人的攻撃が企てられ、こうした現象は一九二〇年四月四日、五日にエルサレムで生じた狂暴なポグロム（ユダヤ人襲撃）で頂点に達した。もちろん、シオニストたちは何もせず傍観していたわけではなく、バルフォア宣言の支持を取りつけるために、世界中の世論を動かそうと努めたし、いくつかの政府は、シオニズムの大義を弁護することをイギリス人に促すために介入した。とうとう、シオニズム機関は最も雄弁な弁士をサンレモに派遣し、シオニズムの大義を効果的な仕方で主張させた。最終的にはシオニストたちが優位に立った。四月二四日、連合国はサンレモで、バルフォア宣言はパレスティナ委任統治の法的根拠でなければならず、大英帝国がこの委任統治を引き受けねばならないとの決議を下した。この儀式ばった決議から丸々一月経った一九二〇年七月一日、パレスティナの軍事政府は、委任された権力の文民統制に取って代わられた。

以下の論考はサンレモでの会議の報告が出た直後に書かれたものだが、そこでブーバーは、シオニズムに対するアラブ人の抵抗が始まった背景を社会主義的な観点から描写している。ブーバーは、シオニズムに対するアラブ人の敵対的態度を、アラブ人の大土地所有者たるエフェンディが



仕掛けたものとして呈示している。自分たちの利害がシオニズムの先駆者たちの社会主義的価値によって脅かされたので、エフェンディはアラブ人農民大衆たるフェラハに、シオニストたちの歪曲された像を描いてみせた。あたかもシオニストたちが彼らにとって危険な存在であるかのように。それに対して、ブーバーが主張するところでは、シオニズムはフェラハの敵ではまったくない。いずれにしても、ナショナリズムならびに帝国主義的後ろ盾から自由になることにシオニズムが成功している限りでは、そうである。統治を委任された権力、すなわち大英帝国による軍事的サポートへの信頼は、アラブのナショナリズムからシオニズムを庇護するものではなく、それどころか反対に、アラブ人の憤りを募らせ、それを正当化した。もちろん、ほとんどもう手遅れだった。なぜなら、シオニズムはすでに取り返しのつかない仕方でイギリス帝国主義の利害と結託しているかに見えるからだが、それにもかかわらずブーバーは、イギリス人による後ろ盾から逃れ、アラブ人大衆との連帯を実現するようシオニズム指導部に要請している。ただこのような道を歩むことでのみ、シオニズムの道徳的完全さとその政治的将来は保障されるとの結論にブーバーは至った。

（1）この点については、Y・ポラートの『パレスティナ＝アラブ民族＝国民運動の発生　一九一八―一九二九年』（Y. Porath, The Emergence of the Palestinian-Arab National Movement 1918-1929. London, 1974, S. 20-30）を参照。

（2）一九一九年一月三日の署名が記されたファイサル＝ヴァイツマン協定の文書は、W・ラカー編の『イスラエル＝アラブ読本――中東紛争実録史』（W. Laqueur (Ed.), *The Israel-Arab Reader-A documentary history of the Middle East conflict*. Nr.8, 1969, S. 36-38）に収められている。

（3）この反乱のその後の展開はポラート前掲書（S. 31-69）で詳細に論じられている。

## 時すでに遅し

一九二〇年

（……）勝利した列強の代表者たちがヴェルサイユに集った時には、パレスティナのアラブ人のあいだではまだ大規模な民族＝国民的社会主義的運動は起きていなかった。少なくとも、攻撃的な傾向を伴った運動はまだ起きていなかった。攻撃的な傾向はヴェルサイユ、ロンドン、パリではじめて顕著なものとなった。万人にとって明白な領土の奪い合いの光景を通じてそうなったのだが、この奪い合い

はトルコの領有をめぐる交渉を、ペネロペーさながら織っては解く終わりなき営みたらしめた。アラブの代表者たちはヨーロッパのうちに、一義的な命令の言葉の代わりに様々な声の錯綜と対立を見出したのだが、このことは彼らに、地球の支配者たちに対する畏敬の念に満ちた敬意をすぐさま失わせるに十分だった。彼らはトルコ人と同様、すぐさまあちこちで同盟を結び、ある強国を他の強国に反対させたり、後者を前者に反対させるがままにし、双方の強国との関係からみずからの利益を得るべきだということを理解した。この新たな態度、ヨーロッパの政治的環境による性急な教育の所産は必然的にアラブ人住民に反作用を及ぼした。そして、アラブ人住民はというと、当初考えていたのとはちがって、新たな曲が始まったのではなく、古い戯曲の新たな幕が新たな舞台装置と新たな配役で始まったのだということに気づいたのだ。そして最後に、パレスティナのアラブ人社会がこの事態と係ることとなった。

一九一七年末、バルフォア宣言の知らせがパレスティナに届いた時、不満をあらわにしてそれを迎えたのは、アラブの大土地所有者たちだけだった。たしかにわれわれは、フェラハはユダヤ人の移住から自分たちの生活水準の向上を期待できるのだということを、彼らに対して明確化するのを怠った。けれども、彼らは総じて、一種の動物的な勘からユダヤ人に対して好意的で、ユダヤ人とうまくやっていこうとする傾向にあった。それに対して、エフェンディは自分たちの所有物が脅かされていると感じた。それはもっともなことだった。なぜなら、大領主は、目的を自覚した民族＝国民的入植に長時間持ち堪えることができないのだ。では彼らは、とりわけパレスティナの占領が完了した後で、バルフォア宣言に抗して何ができたというのか。宣言を真摯に受け止めるなら、大したことはできはしない。そうでない場合は、様々なことができるだろう。なかでも、大領主たちは、自分たちに対する脅威を、何も知らないフェラハに、フェラハ自身の生存に対する脅威として示すことができた。これは、どの民族においても、その搾取者が好んで行うことで、その際、搾取者は彼らによって搾取された者を国際的連帯から逸脱させて民族＝国民的連帯のうちに陥れるのである。

ところが、バルフォア宣言は真摯に受け止められなかった。その創立が予告された国際連盟も、大国協商評議会も、英国政府も、アラブ人に呼びかけて、状況を明晰に解明してやり、大規模で計画的なユダヤ人の移住から彼らが得ることができるだろう経済的・文化的な利益を彼らに示してみせることはなかった。来るべき民族＝国民的家郷がもたらすだろう利益をめぐるアラブ人とユダヤ人との相互理解



を強めるための営みは、ヨーロッパではまったく見られなかった。それに対して、当のパレスティナにおいては、そこに設置された管理機構に属する人々は、このような相互理解を破壊するためにすべてのことを行った。なぜなら、管理機構は、ナポレオン以降の時代の数々の占領担当局がつねに望んだのと同じことを望んだからだ（それはポーランドでのドイツの振る舞いと似ているとも言える）。すなわち、単に現状を維持し、未来の状況を準備したりはしないこと（未来の状況については、それを実現することがどれだけ本国の利益になるのかを、管理機構自身は知らなかったし、ロンドンから知らされることもなかった）。中央官庁において厳格な方針が欠如していたことを勘案するなら、管理機構が未来の状況を阻もうとしたのも当然の結果であったろう。今は、このように一方の陣営に嫌がらせをし、他方の陣営を煽動することを本義としたこのような態度の詳細を究明するべき時ではない。ともあれ、このような態度は、一方ではヴェルサイユ会議の支離滅裂が東方に及ぼした由々しき影響、他方では、（ヨーロッパで言われるような）アラブ「大資本」において覚醒した所有不安と相俟って発展し、ここ数ヵ月の騒動に、そして遂にはエルサレムでのポグロム（一九二〇）を産み出すに至った。

このような展開ならびにこれらの出来事に対して、英国政府は何ら反応を示さなかった。様々な論議をもってバルフォア宣言に異議を申し立てた政治家や軍部指導者たちの立場はこうして強化された。加えて、フランスとの不和が近年新たに激化すると、（英国政府による）無関心・不干渉宣言も間近かと思わせるような危機的な時期が到来した。この時期は今では乗り越えられたが、その功績の大部分はわれらがユダヤ陣営の政治的代表に帰される。ただし、このような功績が真に不朽の功績と化すのは、ここ一年半の発展から、ここ三ヵ月の出来事から、ここ二週間の危機から正しい帰結を引き出す時であろう。すなわち、内的独立という帰結を。

相互了解を代理人によって、更には軍部を民間機構によって置き換えれば悪は退治されるだろうと想定することは、危険な錯覚を産み出すことになるだろう。たしかに、将来のエルサレムでは、「政府はわれわれとともに！」と叫びながら、群集が通りすがりのユダヤ人を襲うなどということはなくなるかもしれない。しかし、今このように煽られた運動がイギリスの権威だけで消火されるなどと信じられるだろうか。また、より強力な手段、より強力ではあるが強制的ならざる手段――なぜなら強制的な手段は持続的な援助を産み出さないからだが――をもって、この運動を支配できない場合には、この運動はむしろ様々なかたちでの

慢性的形式をまとうことになるなどと信じられるだろうか。現在のヨーロッパの政府もしくはそれに似た将来の有能な政府であれば正しい手段を見つけて、それを用いることができるなどと信じられるだろうか。こうした政府は、東方のこの転回期にあって、考え抜かれた意味深い東方内政を実践できるなどと信じられるだろうか。

戦争の始まった頃、私はわれわれの生きている時代を「アジアの危機の時代」と名づけた。この時代は後に、「起こりつつある反乱」というその第二の段階に踏み入った。この過程に抗して、西欧――現下の国家秩序とその指導者たちによって代表されている限りでの――は、時に盲目、時に軽率、時に無力であることを、いずれにしてもそれと正面から取り組んでいないことを証した。列強は中央ヨーロッパの新たな構築という課題を最も酷いやり方で根底から台無しにしてしまったのだが、そうである以上、列強は問題に着手する時からすでに、近東の新たな形態を産み出すことを拒絶していたのだ。パレスティナのなかで、パレスティナにおいて起こったことは、われわれからすれば、この根深い無力の特に明白な徴候と映った。人間を変えればこの無力を払拭できるという危険な錯覚に身を委ねてはならない。ただ、根底からシステムを変えることだけが有効でありうる。けれども、このようなシステムの変化が期待できるとすれば、そのためにはヨーロッパというシステムそれ自体が変化するしかない。おそらく言うまでもないだろうが、私はここでボルシェヴィキ化のことを考えているのではない。そうではなく、今日すべての民族（フォルク）の深奥を揺り動かしている基礎的な共同体の力、諸民族（フォルク）に生来備わった有機的社会主義――未来の大いなる力であるような――にもとづく公共生活の変化のことを考えているのだ。ヨーロッパについても東洋についてもその新たな秩序づけに貢献できないことが明らかとなった原理、それはまた、社会の新たな建設にも貢献できないことが今や明らかな原理でもあるのだが、それは中央集権的国家という原理である。社会を刷新するよう呼び求められた原理、そのような原理だけが諸民族（フォルク）の関係ならびにヨーロッパとアジアの関係を再生させることに成功しもするのだが、それは連邦主義的社会主義という原理である。脱中央集権化された自律的な労働団体にもとづいて建設された共同体だけが真の国際連盟へと結集することができる。このような共同体だけが東洋に手を差し伸べることができる。そして、その手は兄弟によるごとくに握り返されるだろう。なぜなら、このような国際連盟はもはや力で押さえつけようとはしないからだ。



われわれは、ヨーロッパとアジアの媒介者としてパレスティナに行こうと欲しているのだが、曖昧模糊たる夢から覚醒した東洋の前に、没落寸前の西洋の使者として現れて、西洋とその当然な不信感を共有することなど、われわれにはできはしない。われわれは新たに生まれ変わろうとしている西洋の伝令に選ばれたのであって、そのわれわれは、われらが東方の兄弟たちが、西洋とともに、そしてまた自分自身の力で真の共同体生活を基礎づける、その手伝いをすべきであるのに、今日に至るまで、東洋と西洋のエフェンディたちは、そのような共同体生活を真に正しく切望することをみごとに阻止してきた。ヴェルサイユ会議の邪悪な精神は東洋と西洋を架橋することがまったくできなかった。それに対して、われわれはそのような橋を建設することができる。われわれ自身の社会主義的真理にもとづいてそうすることができる。アジアの部族における抑圧された階層に解放のメッセージをもたらすことで、われわれは彼らを権力の亡者で攻撃的な偽りのナショナリズムの狂乱から解放しもするのだが、このようなナショナリズムによって、彼らを抑圧する者たち――ヨーロッパとヴェルサイユの優等生たち――は、抑圧された者たちのうちで育った人間性への願望をその自然な目標から逸脱させようと努めているのだ。ただし、われわれにこうしたことが可能となるのは、われわれ自身が如上の課題の実現をまったく真摯に受け止める場合、われわれが自分の魂を偽りのナショナリズムから引き剝がす場合、われわれの社会主義が単なる戦術とプロパガンダではなく、能動的な憧憬にして創造的意志である場合に限られる。これは先に私が語った「強力な手段」であり、魂の自己防衛であって、それだけが、パレスティナでわれわれを脅かしている魂への慢性的襲撃を一掃することができる。東洋の覚醒せる眼差しに対して、憎まれ者のスパイ、探偵として現れるのか、それとも、愛される教師、教育者として現れるのかはわれわれ次第なのである。